2020 年 1 月 18 日

加藤周一文庫公開購読会――『羊の歌』を読む
「桜横町」

加藤周一現代思想研究センター研究員

半田侑子

【梗概】

「桜横丁」において重要なテーマは、「長井邸の金網」に象徴されるような「階級・階層社会の境界」と「局外者であること」「疎外感」である。鷲巣力が『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか――『羊の歌』を読みなおす』（岩波書店、2018、pp.100-102、以下『いかにして』）において、すでに指摘したように、「長井邸の金網」は、「祖父の家」に描かれた「石垣」と対照をなし、これまでに描かれた「世界の内と外」「境界」というテーマと地続きである。

加藤は「中産階級の子供」（『羊の歌』改版 p.63、以下は旧、改ページ数のみ表記）として町の学校[1]へ通い、「町の子供」である級友との違いを経験する。級友たちは加藤の家の大きさに尻込みをし、つき合うことが難しかった。しかし例外的に加藤に強い印象を残した二人の級友がいる。「頭の大きな子」と「大工の子」である。彼らは二人とも家の仕事を手伝い、あるいは子守をし、すでに子供の社会以外の社会を知っていた。「頭の大きな子」と「大工の子」は「中産階級の子供」である加藤と「階級」が違うが、子供の社会の価値体系の内側にいないという点で加藤と共通していた。そのことは同じ「中産階級の子供」であった日本郵船の船長の娘[2]も同様である。また中学生の頃、芥川の『夜来の花』が読むに足ると彼女から聞かされたことが、加藤の芥川との出会いであった[3]。

加藤は「町の小学校」へ通い、「局外者」としての自意識を持つ。また学校の外においても加藤と他の世界を隔てるものとして「長井邸の金網」が存在する。「長井邸の金網」は物理的なも

---

[1] 東京府豊多摩郡渋谷町立常盤松尋常小学校（現・東京都渋谷区立常盤松小学校）。鷲巣力の指摘によれば、加藤の住まいからは本来ならば、渋谷町立渋谷尋常高等小学校（現存しない）が通学校であったが、父である信一の意向で前年に新設された常盤松小学校に入学させた（実妹の本村久子氏談）。「そのために、南青山に住まいする辰野保（フランス文学者辰野隆の実弟）の家に加藤を寄留させてもらった。「町の小学校」に通うのがよいと考えていた父信一が、わざわざ寄留させてまで常盤松小学校に入学させた理由はよく分からない」（鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波書店、2018、p.118）加藤はいわゆる「越境」をして、自宅から少し離れた常盤松小学校へ通っていた。

[2] 日本郵船の船長の娘とは、山田千穂子という人物のようだ（『いかにして』p.125）。『青春ノート』中の未完の小説「分譲地」にも「ちいちゃん」「千穂子さん」という、この人物をモデルにした登場人物がある。また、「千穂子さんへ」と題した短い詩もノート中に見られる（『加藤周一　青春ノート』（鷲巣力、半田侑子編、人文書院、2019, pp.28-31）

[3] 加藤が 1949 年に発表した「芥川龍之介小論」にもこのエピソードは語られる。

のというだけでなく、心理的なものでもある。加藤は学校において、町において、周縁的存在であり、観察者であった。それがのちの「高みの見物」[4]の思想の土壌となったと考える。

【これまでの章との関連】

先述の通り、「祖父の家」に描かれる加藤の住む世界と立ち並ぶ長屋を隔てる石垣は「長井邸の金網」と対をなす。「祖父の家」では内から外との関わりを見出せなかった加藤が、「桜横町」では金網の外からの観察者となる。また「土の香り」における田舎の子供の視線、宴会での強制された観察者の立場も、見えない「境界」で隔てられた二つの世界を示している。「渋谷金王町」では家庭という、合理的な、理解することのできる小さな世界と、理解することのできない不条理が存在する外の世界、「世界の秩序」と「不正」の対比が描かれる。「病身」では加藤が級友たちと馴染めなかった理由として、「町の子供」と医者の子供の違いだけでなく、父との会話が、加藤を、子供の社会の価値体系に誘わなかった理由として挙げられている。

このように、これまでの三章は、世界の対比が描かれるなかで「桜横町」は「二つの世界」が交わる場所として描かれる。

【１】「頭の大きな子」と「大工の子」と「社会とその価値の体系」

「頭の大きな子」は学校では「教室のなかでいつも出来がわるく、教師から怒鳴られてばかりいた」が、氷店で出会った彼は機敏に働いていた。

「父が氷の代を払い、その子がうけとる。この世界は、実は、父と頭の大きな子との取引きによって動いているのであり、私は単にそれを見ているにすぎない。それは私にとって頭の大きな子の再発見であると共に、私自身の位置と役割の再発見でもあった」（旧 pp.52-53、改 pp.59-60）[5]

一方で「大工の子」は加藤の教室での競争相手だったが、彼のうちを訪問した加藤は、その競争が「全く条件のちがう競争」であったことを知り、「そのことにほとんど後ろめたさを感じた[6]」。（旧 pp.53-53、改 pp.60-61）

この二人の例外の「町の子供」に共通しているのは、教室の内と外では別の側面を持っている

---

[4] 「高みの見物について」（『雑種文化』講談社文庫、1974）

[5] この直後の「赤や黄や緑の鮮かな色をつけた氷は、外から見ていたときにはうまそうだったが、実際に口に含んでみると、うまくはなかった」という一文は示唆的である。

[6] 鷲巣によると、この「後ろめたさ」の根底に平等思想の考え方がある（『いかにして』pp.120-121）。

ことである。教室の内と外ではまったくちがう価値観が支配していた。

「教室では、国定読本を自由自在に読む子供が尊重されて、「メンコ」に熟達した子供は小さくなっていた。八幡宮の境内では、「メンコ」の上手な子供が周囲に号令して、国定読本を読む能力には一文の値うちもなかった」「しかし私が理解していなかったことは、私の択んだ社会とその価値の体系が実は全く子供の社会のそれではなかった、ということかもしれない」（旧 p.55、改 pp.62-63）

加藤が択んだ「社会とその価値の体系」はここでは明示されない。しかし、ここで加藤は「社会とその価値観」は択ぶことのできるものだ、と捉えていると読める。加藤は多様な異なる社会と価値観が存在していることを前提としている。
また、加藤のその選択には、父信一が大きな影響を与えたことはすでに「病身」において示唆されている。

「私は本を読み、多くの言葉を覚え、それ以上に多くの疑問をもっていた。その疑問をはらすために、相談することのできる相手は、身の廻りでは、父の他にいなかった。当然私は父と話し合うことが多く、そのものの考え方から強い影響を受けざるをえなかった。話相手の少かった父自身が、小さな息子と話すことを好んでいたということもあるだろう。「子供にあまり何んでも話すのは、どうかしら」と母はいっていた。しかし一種の悪循環は、すでにはじまっていたのである。小学校へ行くようになると、私はただちに、他の子供たちが、私と父との間での話題に、なんの関心ももっていない、ということを知った。私は、彼らが問題そのものを発見していない、ということを発見し、いよいよ父との会話をたのしむようになった[7]」（旧 p.47, 改 p.53）

【２】象徴としての「桜横町」

（１）二つの世界が交わる空間としての「桜横町」

「からたちの空き地のように町から離れてもいず、八幡宮の境内のように男の子だけの遊び場でもなく、桜横町には、男の子も、女の子も、文房具屋のおかみさんも、自転車で通るそば屋の小僧も、郵便配達もいたのである。学校に近かったから、道玄坂などとはちがって、半ば校庭の延長のようでもあり、しかし校庭とはちがって、町の生活ともつながっていた。私は二つの世界が交わり、子供と大人が同居し、未知なるものが身近かなるものに適度の刺戟をあたえ

[7] 「読書の想い出」（「自選集」第３巻、別紙参照）

るその桜横町のひとときを好んでいた」（旧 pp.57-58、改 p.65）

（２）「桜横町」の原型はすでに『青春ノート』に現れる

『青春ノート』ノートⅡに書かれた「伊藤整調の詩　高貴な恋の物語」において「さくら横町」という言葉が見られる。ノートⅤに挟み込まれた「藤澤正自選詩集」[8]にも、この詩をわずかに手直しした「高貴な恋の物語」を選び収録するが、「さくら横丁」と漢字が変更される。

（３）詩歌としての「さくら横ちょう」

「後年私はいくさの最中に、何度か桜横町を想い出した。その頃私は日本語の詩に韻を用いる工夫に凝っていた[9]ので、16 世紀のフランスに流行したロンデル[10]の韻を借りて、桜横町の歌をつくった」（旧 p.59、改 p.67）

加藤は「桜横町 Sakura Yokochou」「恋の昨日 Koi no Kinou」「会い見るの時はなかろう Ai miruno toki wa nakarou」が韻を踏んでいると書くが、それだけではなく「to」と「ou」の音を繰り返す脚韻を用いている。

「さくら横ちょう」の初出は「DEUX RONDELS」[11]と題され、「雨と風」とともに発表された（『綜合文化』2（１）、眞善美社、1948 年１月）ただし、窪田啓作他との共著『マチネ・ポエティク詩集』[12]（眞善美社、1948 年 7 月）掲載時には「1943」と小さく書かれており、この詩が作られたのは戦時中であることがうかがえる。（「いくさの最中に何度か桜横町を想い出した」）

その後、「さくら横ちょう」は『加藤周一詩集』（湯川書房、1975 年）、詩集『薔薇譜』[13]（湯川書房、1976）、『加藤周一著作集 13―小説・詩歌』（平凡社、1979 年）などに再録される。また別宮貞夫、中田喜直によってそれぞれ歌曲化され、今日でも歌われる。[14]

2016 年には、「さくら横ちょう」を記念した詩碑が金王八幡神社と加藤の通った常盤松尋常小学校からほど近い場所に建立された。

---

[8] 「藤澤正自選詩集」はその抄録が『加藤周一　青春ノート』に収められる。
[9] 加藤と「マチネ・ポエティク」の詩作活動については『加藤周一　青春ノート』の「健康行進曲」を参照されたい。
[10] ロンデルとは中世の定型詩、13 ないし 14 行から成り、二種類の脚とリフレインをもつ。
[11] 『綜合文化』2（１）の目次には「DEUX RONDELS」とのみ掲載される。
[12] 『マチネ・ポエティク詩集』では「雨と風」の冒頭に小さく「RONDELS」と表記される。
[13] 『薔薇譜』では「雨と風」「さくら横ちょう」はそれぞれ独立した詩として取り上げられ、「RONDELS」などの記載はない。
[14] 別宮は 1951 年、中田は 1962 年にそれぞれ作曲している。（『いかにして』、p.127）また別宮は「二つのロンデル」として「さくら横ちょう」のみならず雨と風」も作曲した。

加藤が通ったという「桜横町」がどこにあったのか、正確な場所は不明である。

【終わりに】二つの世界を乗りこえるために

「桜横町」は次のような一文で締めくくられる。

「私は私の自ら欲するものに近づくのに臆病だった。そして私のみずから欲するものは、しばしば私が参加することの到底不可能な別の世界に属していた。私は町の小学校で、社会を知ろうとしていたのではない。社会のなかでの自分の位置を知ろうとしていたのだ」（旧 p.60、改 pp.67-68）

「長井邸の金網」は超えようと思えば超えられうるものだった。「誰もそれを乗り超えようとしなかったのは、金網が単に物理的なものではなく、心理的なものでもあったからだろう」（改 p.66）と加藤は書いた。「祖父の家」の石垣、また「長井邸の金網」は、世界を分断する境界の象徴である。しかし、「別の世界」に属するものを欲する子供時代の加藤は、彼がいずれ分断を超えていこうとすることの暗示であろう。またこの分断、垣根を超えていこうとする意思は、のちの「非専門化の専門家」の思想の土壌ではないだろうか。

加藤がこの時期に感じていた世界の境界は、階級社会、階層社会や国境などとの相似形である。そこから疎外された「局外者」だけが「高みの見物」によって「無責任であり、特定の立場によらず、すべての立場に対し公平な態度をとることができる」[15]。

フランスにおける最初期の知識人論の一つとして知られるジュリアン・バンダ『知識人の裏切り』（J.Benda, *La Trahison des clercs*, 1927）は、知識人を聖職者に例えた。あらゆる世俗的権威や権力と利害関係を持たない理想化された聖職者である。「局外者」はその意味でバンダの聖職者にちかい。後年の知識人としての加藤の原点は「局外者」としての体験にあったと考える。

以上

[15] 「高みの見物について」（前掲『雑種文化』p.18）